

# 福祉系対人援助職養成の現場から

64

## 西川 友理

### アートプレーパークでのボランティア

学生とともに、子ども向けアートプレーパークでのボランティアに参加しました。

子どもが自由に遊ぶことが出来るプレーパークは、全国各地で様々なかたちで開催されています。今回参加したのは、NPO 法人 地域文化に関する情報とプロジェクトさんによる、アート活動をメインとしたプレーパークです。

具体的には、入口で絵の具代300円を払えば、筆やローラー、ブラシ、へら、スポンジ、ローラー、スポイト、霧吹きなどの道具を自由に使い放題、水彩絵の具も色とりどりの色画用紙もおかわりし放題、開催時間以内ならどれだけ描いても自由！というスペースです。

開催スペースには汚れないようにビ

ニールシートやマスキングテープをしっかりと敷いて養生し、全面的に汚れを気にしなくてもいいような環境を整えます。

スタッフは、出来るだけ子どもたちが表現したいことを表現することを大切に、自他に加害を加えるような事態でないかぎり、何かを禁止するようなことは出来るだけしたくない、禁止なんてしなくて済むような場をつくろう、という考え方を共有しています。

以前から授業でこの場所の話をし、一緒に参加しようと学生たちを誘っていたのですが、いささか交通費がかかるということもあり、経済的に苦しい学生も増える中で、なかなか足が向きにくいようでした。紹介し始めてそろそろ1年が経過するかという頃に「せっかくだから一

回くらい行ってみたいかも…」と学生が2人、名乗りを上げてくれました。

### 活動スタート！

いざ活動が始まって、いろんな親子がやってきました。

子ども達は、最初はおずおずと場の様子を見ながら活動を始めますが、この場の自由さを肌で理解していくにつれて、やがてどんどん自由に、好きなように表現を展開していきます。

子どもがどんどん自由になっていく様子を見て、最初はこの場を汚してはいけない、絵の具のもったいない使い方はいけない…という思いにとらわれていた親御さんたちも、徐々に解放されていきます。

多少服を汚しても、多少腕や顔や足にべったり絵の具を塗っても、多少そのままその場で転げまわっても、多少画用紙と上着を水浸しにしても、そしてそのまま抱っこして、と言ってきても…まあ、いいか！そうね、いいよね！！と、なんだか楽しくなっていく子どもと親御さんがあちらこちらで発生します。

### 気になる女の子

色画用紙を渡す担当をしていた学生のうちの1人がふと、ひと組の親子を見て、「あの女の子、3歳くらいやんな？もう

1時間以上いるね。」

とつぶやきました。それを聞いたもう1人の学生が、

「え、そうやったっけ……？」

「うん、〇時位から来てるから、もう1時間はずっとあそこにいる。」

女の子は、絵の具を触ってみたり、水に絵の具を入れてみたり、少しだけ紙に絵の具をつけてみたり、あっちの色をこっちに持ってきたり、色のついた水を混ぜたり…真剣なまなざしで、絵の具や道具、色画用紙と向き合い、いろんなことをやってみています。一つの動作ごとにかたわらにいるお父さんに「これ見て！」と伝え、お父さんは「うん、そうやね」と答えています。

お父さんは「ここに描いてごらん」「ほら、ここに付いたらどうなるかな」と、いわゆる「お絵描き」をしてみしてほしい様子。女の子に色々働きかけます。

そんなお父さんに、スタッフが伝えます。

「“お絵描き”だけにこだわらなくていいですよ。絵を描くだけじゃなくて、水を触ったり、絵の具の色を楽しんだり、いろんな道具で、自由に、好きに、楽しむ場ですから、とにかく好きなように味わっていただけたら…。」

この場に年齢制限はありません。やっとお座りが出来るくらいの人や、はいはいで動き回る子どもさんも参加大歓迎、もちろん子どもを連れてきた大人が遊ぶことも大歓迎。絵の具を手足で感じたり、

いろいろな色を混ぜてみたり、紙にくっつけてみたり、道具を叩いてみたり、水に漬けたり、水で流してみたり、あるいはその水をスポンジで吸い取ってみたり…。

スタッフのその言葉と、周りの人々それぞれの、思い思いのあり方に、お父さんも気持ちがほのかれたようでした。

それからそのお父さんは、「これ使いたい」「ほら、これ見て」「水を汲んできて」等女の子から発せられるメッセージに対応して、見守るように傍らにいらっしゃいました。

2人の学生は自分たちの活動をしながらか、その親子を気にしています。

「いやあ、もう1時間半経つで」

「ええー…すごいな、もう2時間になるで」

「まだ飽きないのか、すごいな…」

結局、その女の子は、2時間半近くかけて、数枚の絵を描きあげました。

女の子のお父さんに「すごい集中力ですねえ」と言うと、

「何か、これと決めたら入り込んでみたくて…ずっと遊んでましたねえ！」と言って、笑っていらっしゃいました。

### 子どもの集中力は何分位？

その親子が帰った後も、学生たちは話していました。

「保育の分野では、よく、子どもの集中

力は5分～15分くらい、っていうやん？」

「ほんまに！どこが15分やねんって思うな、あの子見てたら。」

「そうそう！あんなに長い時間集中するなんて、マジで学校では習ってないって！ビックリやわ、ほんま！」

そのやり取りを聞いて、私は感心してしまいました。

「確かに！！そうやんね、そんなん習ってないよね！年齢にはよるけど、5分とか15分とかその程度だってよく言うものねえ！！」

終了後、当日のスタッフによるふりかえりミーティングで、学生にこの話をしてもらいました。

アートプレーパークでは、子どもが夢中になってずっと遊び込む姿はよくあることで、学生の気付きに逆に改めて気付かされたという人がいました。

「学校では、子どもが集中できる時間は5分とか15分くらい、とか習ってるの？」

「はい」

「「「へー！」」」

「それはさあ、“子どもが集中できる時間”じゃなくて“大人が与えようとしてるものに付き合ってくれる時間”やんね」

「「「確かに！！」」」

わははは、とその場では皆で笑っていましたが、後から振り返ると、これはなかなか味わい深い話だったと思うのです。

子どもが集中できる時間を5分や15分と想定して、集中を途切れさせないような状況を作る、保育の展開を考える。

そして子どもはそのプログラムに合わせて、大人の“おもわく”にあわせて、日々を過ごしていく。そう考えると、なんだか滑稽な、誰のための何のための保育かわからないようにも思います。保育者にそのつもりはなくても、「大人のしたい保育」に子どもを付き合わせるようになるかもしれません。でも、その日その時の保育をどう展開させていくのかを考えるための計画書である「指導案」をつくる時などは、そうすることが正しいと思われたいように感じています。

あの3歳の女の子は、学生たちに「ほんとに？」という問いを投げかけてくれました。

### 親御さんに対する気付き

2人とも、帰るころには、  
「小さい頃にここに出会いたかったな…今の歳でやろうと思うと、どっか“服汚れる”“絵の具出しすぎたらもったい無い”って制限入るもの」

「最初、“ちょっと家から遠いわー”と思ったけど、ほんまに来た甲斐あった。めっちゃ面白かった。」

「“遊び込む姿”ってのを見たよね。」と口々に話してくれました。そして、  
「…あとね、あの2時間以上遊んでた女の子、あの子もすごかったけど、お父さんもすごかった。2時間半やで、2時間半。保育者でもあんな状況付き合えへんって……。」

「確かに、あのお父さん、すごいなあ。あんな親がいるんやなあ。ああいう対応が出来るから、子どもが安心して遊べられてんのやな…。」

私は、そういえばそういう親の存在も「学校で習ってない」ことだよな、と思いつつ聞いていました。

テキストに出てくるのは、子育て支援が必要な親御さん。子どもと向き合えない、子育てに苦しんでいる、余裕がない、そんな親御さんにどう向き合うか。「お母さんやお父さんは苦しんでいる生き物」とでもレッテル貼りするような事例ばかりが掲載されています。

実際に、要支援・要養護の子どもとその親御さんに対応すること、悩みや苦しみがあつた親御さんに対応することは、保育者にとって大切な仕事です。しかし、先ほどの学生の言葉を応用するならば、

「あんなに子どもに根気強く付き合える親がいるなんて、マジで学校では習ってないって！」といったところだと思います。

### “大変で” “困っている” 人を助ける 保育者像

保育士養成のテキストには「“集中力が切れがち子ども”にどう対応するか」「“苦しみ悩む父や母”にどう対応するか」という文脈に代表されるように、子どもや親が課題と共にある姿と、それへ

の対応方法が多く取り上げられています。

その課題解決に動く保育者は、さながら子どもと親にとってのヒーローです。困った人を助ける人、悩んでいる人を慰める人。子どもや親と共にいる、という姿すら、“寄り添う”という言葉で表現され、なんだか懐の深さを持っていますよ…みたいな表現だなあと感じます。保育者というのは、そういうものだと教えています。

でも、そうではないでしょう。子どもや保護者はそんなに弱い存在でも、ダメな存在でも、ありません。保育者が何かしてあげなければ、助けてあげなければ…などと考える間もなく、本当はどんどん自分たちで気づき、自分たちで対応し、どうしたらいいか、色々考えて、行動できる人たちです。

「日々をいきいきしく生きる子ども」  
「遊び込める環境があれば、何時間でも集中する子ども」「子育てを楽しんでいる親御さん」「子どもとの向き合い方がとても素晴らしい親御さん」、そんな人もいることを、いやむしろ環境さえ整えば、ほとんどの人がそうであることを、まずは実感として知る事が大切だと思います。

これにより、「子どもを一人の人として尊重しましょう」「親御さんには敬意をもって接しましょう」という言葉だけの表面的な理解でなく、心から子どもと親御さんに敬意を持ち、相手の存在を尊重していくようになります（例えば、養

成校へ入学当初は「子どもって可愛い」と言っていた学生が、いくつかの現場経験を経ると「子どもってすごい」「子どもって面白い」と表現するようになる、といった形で現れます）。

自分たちはヒーローではない。子どもや親御さんたちは力を持った存在で、本当にその成長を共に過ごすことが大切。そのように、ヒーロー幻想がなくなっはじめて、ヒーローではない“わたし”だからこそ、素晴らしい存在である“子ども”や“親御さん”だからこそ、いっしょにいて何ができるのか、地に足付けて考えることが出来るようになると感じています。

## 現実と理想

ボランティア終了後の帰り道、途中まで学生のうちの1人とともに、2人で帰りました。その時に、初めて彼女が、「…でも、あれは普通の幼稚園や保育園ではできないですよー。」ため息交じりに言いました。

「…というと？」

「実際そんな無制限に絵の具を使えない、服も体も汚す。ああいうの嫌いな子も好きな子も、いろんな子がいる。ていうかそもそも、園だと、大人に対して子どもの人数が多すぎる。環境設定とかどうしたらええのか…“園”という場所であれをやるってというのは、なかなかできない。…なんていうか、今日のプレーパー

クは…贅沢な体験やったと思う。ほんとに、樂園みたいなところでした。私が子どもの時に出会いたかった…。あれを普通の園でやろうってのは、出来へんと思う…。」

「出来へんと思うの？」  
と聞き返すと、ちょっと戸惑ったように「え、だって…出来へん…のじゃないのかな？全く出来へんというわけではない…かな？いやでも難しいんじゃない…かな…？」

頭を捻る学生です。

「今日“好きなことを好きなだけ遊び込むことが出来る所では、子どもはこんな姿を見せる”っていうことを、体験として知ったというだけでも全然違うと思うねん。だって、今日の子どもたちみんなすごかったでしょ？」

「はい。すごかった。」

「あれに少しでも近づけるためにはどうしたらいいか、っていうことを考えることが出来るんじゃないかなあ…。」

「えー、そんなん無理ー（笑）」

「いや、だから、“少しでも”よ（笑）！本物の“子ども、すごいな！”という場面を見たことがあるのとないのとでは、はやっぱり違うねんって！なんかできないかな、って考えられるヒントがいっぱいあったやん！だって、あんなの、したいと思うでしょ？」

「したいと思う！でも、ふつうの幼稚園や保育所で、どうやったらええのか…？」

理想を知って、地に足付けて、うーんと考え込む学生です。

ヒーローでも、樂園でもないから、  
どうするか。

子どもが何時間でも、自分の好きなだけ、好きなことに無制限に没頭できる環境なんて、今のこの国には本当にわずかにしかありません。

でも、それがどういう体験や意味をもたらすか、この日この学生たちは目のあたりにしました。遊び込む子ども、ともにいる親御さん、樂園のような環境、スタッフの対応…きっとこの学生たちは「子どもの主体性を大切にした保育」という、今や子どもの現場ではどこでも聞かれる言説を、この日以降、今までと違う味わいでもって口にするに違いありません。

目指したい姿を見たのです。それに近づくには制限があるということもわかっています。その制限がある中で、園の中で、何をどう達成できるのか。実践的に考える保育が始まります。

### 先人たちの研究結果と 対人援助の場にやってくる“言説”

人を支援するにあたり、難しいことも多いから、いろんな人が研究しています。その研究結果は素晴らしいものです。私たちはそれらの本を読みます。また、養成校教員は自らも研究を進め、学生にもそれらを伝えます。先人の知見に基づく

様々な考え方、手法、技術が世に出されます。

ただそれが広まる際には、「〇分なら集中できる」「自己決定が大事」「親御さんには寄り添って」等、手法やテクニックや耳に心地いいスローガンのような言説がつつい印象に残りがちです。

テキストや、授業もそうです。養成校教員としては、哲学や理論や根底に流れるスピリッツを伝えているつもりでも“では実際に子どもに対して具体的にどんなテクニックが有効か、何を伝えれば正解か”を知りたい、というニーズは強烈です。今の悩みに正解が欲しいのです。それを使えば、まるでヒーローのように、問題解決が出来るような手法が欲しいのです。

そうすると、その言説自体が、根底にある考え方や科学的根拠や倫理観、哲学等から離れて、単なる小手先のテクニックとして独り歩きしてしまうことがあります。そこから生まれた誤解が、子どもや幼児教育の現場にはそこそこに存在すると感じています。

例えば、近年では“不適切保育”という言葉にその匂いを感じます。

“不適切保育”という言葉が独り歩きして、何が不適切なのか、本当にわからなくなりつつ、「いつか自分が不適切をしてしまうのではないか、むしろ自分で気づいていないけれど、不適切なことをすでにしてしまっているのではないか」とモヤモヤを抱える保育者が増えていま

す。そもそも“何をもって不適切とするのか？”追い詰められた保育者に、一次資料や背景論理や哲学・倫理までさかのぼって考える余裕は、時間的にも精神的にもありません。

すると「〇〇するのは不適切なんだって」「〇〇しちゃいけないんだって」・・・枝葉末梢の言説に踊らされがちになってしまいます。

### 地に足付けて、 今、目の前の人と向き合う

そんな時、目の前にいる子どもや親御さん、同僚といった「人」が、こちらの目を覚まさせてくれます。3歳の女の子が2時間以上遊び込む姿を目の当たりにしたことで、「あなたが学んできたことは、本当に本当のことなのかな」という問いを、学生たちに突きつけてくれたように、「現場で起こっていることは、本当はどういうことなのか？」と、リアルに突きつけられる対人援助の現場です。

実習も大事、だけど本当は、出会うということそのものが大事。

学生たちは、子どもに直接出会う“実習”で多くのことを学んできます。机上で学んだことを、実習で確かめることで、理論と実践が往還する、素晴らしい学びです。専門職として保育者になるために必要なプロセスです。でも、実習は「〇〇を学ばねばならない」「評価をクリア

しなければならない」「日々の記録を書いて毎日提出しなければならない」……等、やらねばならぬことが多すぎます。

だから私は、実習もとても大切だと思うのですが、それよりもまずはただ、「人と人」として、子どもといわず大人といわず、いろんな人に「出会う」ということ、その体験そのものこそが大切だと感じています。

そこで出会う様々なことから、今まで思い込んでいたものとは違う世界が見えてくる。実習のように評価する/される、という関係性がなく、ただ出会うなかで、自分自身が持っていた常識や世界が揺らされる。その体験によって、机上の空論でないひとのありさま、ヒトという存在

について、地に足つけて考えるきっかけが生まれる。それが対人援助の専門職になる者としての大切な土台となると考えています。

なにせ学生という人たちは、出会える環境さえあれば、あとは自分たちで素晴らしい気づきを得ていく方々なんです。知識と情報は授業で伝えられますが、何より自ら得た気づきが学生を大きく成長させます。

養成校教員としては、学生と一緒に新たな気づきに出会い続けていきたい、そのためにどうしたらいいかしら…と、考え続けています。